

M.ドラブルの *The Peppered Moth* に関する一考察 — 家族の肖像と作品の重層性 —

永松美保

九州女子大学、共通教育機構 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2013年6月6日受付、2013年7月11日受理)

はじめに

2000年刊行の*The Peppered Moth*は、マーガレット・ドラブル (Margaret Drabble, 1939-)の14作目の小説である。英文学者のドラブルは、作品の冒頭にその作品のテーマと関連する過去の著名な詩人の英詩を引用して、自らの作品の題辞とするという手法を多くの作品で用いている。*The Peppered Moth*においては、作品の「あとがき」(Afterword)に彼女が記しているように、著名人の詩ではなく、娘、レベッカ・スウィフト(Rebecca Swift)の詩を引用して、題辞としている。同時に、彼女は巻頭辞にこの作品を「キャサリン・マリー・ブローアへ捧げる」(For Kathleen Marie Bloor)と記し、同じく「あとがき」にキャサリン・マリー・ブローアとは実母のことであり、作中のベッシー (Bessie)は実母をモデルにしていると記している。このことだけに着目してみても、*The Peppered Moth*がドラブル自らの家族をモデルにした、いかに伝記的色彩が濃い作品であるかが分かる。

作品は、レベッカ・スウィフトの詩、3頁程の「プロローグ」(Prologue)と同じく3頁程の「あとがき」を除いて約400頁足らずの過去と現在が交錯した事柄から成る内容で構成されている。¹そして、作者、ドラブルが僅かな紙面を割いている「プロローグ」にこの作品の主だったテーマが凝縮されると共に、「あとがき」ではこの作品の伝記的要素とこの作品を執筆するに至った経緯等が記されている。²

「プロローグ」を読むと、或る夏の午後、ヨークシャー (Yorkshire)のメソジスト系の教会に宗教とは関係なく、細菌学者、ロバート・ホーソン博士(Dr Robert Hawthorn)の「ミトコンドリアDNAと母系系譜」という演題の講演を聞くために、60名ほどの人々が集っていることが分かる。この演題にこれから始まる物語が凝縮されており、*The Peppered Moth*はカッドワース(Cudworth)家から1部のDNAを共有した4代に亘る母系子孫の物語である。講演には、無名の老女と彼女に付きそう若い女性が参列している。そこでは、時間が止まってしまった世紀の初めから存在する年代物の柱時計と携帯電話やホーソン博士が講演で使用するコンピュータ、電子スクリーン等が共存しており、こうした電子機器の存在が時代が現代であることを伝えている。また、新旧の事物を共存させることで、作者はこの作品が過去の事柄と現在の事柄が混在するものであることを冒頭で読者にそれとなく知らせることも怠っていない。

*The Peppered Moth*はドラブル自身の家族を主題材にした作品である。しかしながら、カッドワース家に関係する4代に亘る母系系譜の前半世代の者達、即ち、現在はずでに亡くなっている「過去」の者達の人生は、確かにドラブル自身の家族の人生に基づくものであるが、後半世代の者達、作中、存命している「現在」のカッドワース家の母系系譜の者達とその人生模様は、ドラブルによるフィクションである。この作品がおおよそ同比重でフィクションとノンフィクションから構成されているので、本稿では4代で構成されている約1世紀に及ぶカッドワース家の母系系譜の人物達の家族関係を考察し、フィクションの家族関係とノンフィクションの家族関係を絡めることで、ドラブルが作品で何を意図していたのかという観点から本作品を分析してみたい。

Ⅰ. 「過去」世代のカッドワース家の女性達とその母娘関係

「プロローグ」の後、*The Peppered Moth*はベッシー・ボートリイ(Bessie Bawtry、現姓 Bessie Barron)の幼少期を語ることから始まる。本作品で、作者、ドラブルが一番精力を注いで描きたかったのは、ベッシーという人物のことであったことは明らかなので、20世紀初めに生を受けたベッシーがどのような人物であったかを検証して行く。また、検証に際して、ベッシーの母親、エレン・ボートリイ(Ellen Bawtry)が彼女の人格形成に影響を与えていることは否定できないので、エレンとベッシーとの母娘関係から考察することにする。

ベッシーは、母、エレンと電気技師の父、バート(Bert)との間にボートリイ家の長女として、作中、正確な誕生年の記載はないが、1910年の若干前にブリスボロウ(Breaseborough)に誕生している。彼女には、4歳違いの妹、ドラ(Dora)がいる。

*The Peppered Moth*では、カッドワース家の初代となるエレンには詳細な情報が与えられていない。彼女が乳児や子供を好まず、2人の娘達、特に、ベッシーとは親密な母娘関係を構築していなかったことは、作中から窺える。その1例として、労働者階級出身で家の財力に大学進学への期待ができなかったベッシーが猛勉強の末、州の奨学金を獲得しケンブリッジ大学に進学したものの、環境の変化と更なる学問の為に病に倒れた時、旅費を工面してベッシーのところに向いたエレンが、ベッシーからは次のように捉えられていることを挙げることができる。

She [Mrs Bawtry] would have knocked at the tomb door and said, come forth.
But it was not asked of her. The summons was cancelled. Her daughter sealed
the tomb from within.(p.119)³

墓(tomb)というのは比喩表現で、ケンブリッジのベッシーの住居のことだが、上記引用は明らかにベッシーがエレンの訪問を受け入れようとしていないことを表している。更に、ベ

ッシーにとっては、彼女が嫌悪する故郷、プリスポロウからの脱出手段が大学進学であり、⁴ベッシーはこの脱出を成功させる為に体力の限界までの猛勉強を自らに課すと共に、在学中は、卒業に際しての優等学位取得を目指して血のにじむような努力をしている。だが、エレンは娘の勤勉さも優秀さも学位の種類にも関心を持っていないのである。言わば、エレンは娘の人生に無関心と言える。

ドラブルはエレンを「愛の欠如(lovelessness)」(p.119)という言葉で形容しているが、エレンともう1人の娘、ドラとの関係はどのようなものであったのだろうか。次は、死期が迫ったエレンのドラに対する反応である。

Ellen Bawtry had never taken Dora into her arms and cuddled her and rocked her and comforted her. She had not been a tender mother. . . . She [Dora] would have liked to have been able to hug her mother, and to kiss her, and to hold her hand . . . But when she tried, once, to touch that gnarled hand with its embedded wedding ring, Ellen had snatched it away angrily. . . . Dora was hurt by this rejection.(p.196)(underlines mine)

エレンはドラをその腕に抱きしめ、愛撫するような優しい母親ではなかったが、それはベッシーに対しても同じであつただろうと容易に推測することができる。姉のような優秀さを持ち合わせていなかったドラは、大学進学も結婚もせずに、縫製の仕事で生計を立て、実家近くに家を購入し居住している。ベッシーよりも空間的にエレンに近いものがあつたとはいえ、ドラは愛を表してくれなかった母親に対しても、彼女の看病に励み、彼女を抱きしめたいと思う優しさを持ち合わせている。

エレンとドラとの関係よりも、エレンとベッシーとの関係が難しいものであつたことは、死期が迫ったエレン、及び、彼女の臨終に対するベッシーの反応に看取できる。一刻を争う事態であろうにドラからの母危篤という報に触れても、ベッシーは家事と家族旅行を理由にすぐに母親を訪ねることはしない。連絡から3日後にエレンのもとを訪れたベッシーとエレンとの最初の会話は、単に「お母さん、来たよ」、「うん」(p.201)というものであり、それ以上の会話は無い。その状況は「何千年もの沈黙が彼女達の後ろに積み重なり、彼女達の間で冷たく横たわっていた」という2人の関係の冷淡さを物語るものである。こうしたおぎなりの2人の会話は、死期が迫っているエレンが言葉を発することが億劫になっていることだけに依っているものでないことは、エレンの最期に関する一連のベッシーの言動から明らかである。では、ここでベッシーがどのような言動を取つたのかを考察してみる。

重い腰を上げ、実家に戻ったベッシーは、⁵ 帰郷した夜、母親の最期を目前にして両親の避妊のことを話題にできる神経の持ち主であると共に、母親の思わぬ生命力で死期が伸びた

ことで、母親の抗議の視線に触れながらも、僅か帰郷2日後には予定している家族旅行を理由に実家を後にする人物である。家族旅行へ旅立ったベッシーは、旅先に舞い込んだ母臨終の知らせにも動揺することなく家族旅行を継続し、葬儀に参列しないどころか、葬儀の夜に、平然と家族で映画鑑賞すら行っているのである。エレンが母親として娘達に愛情を注ぐことが不得手だったことが、ベッシーの母親に対する否定的思いに繋がって行ったと考えることも可能である。だが、家族旅行の遂行に関して「恐らく、エレン自身も同じことをしていただろう」(p.204) という語りから判断して、ベッシーとエレンはその精神性が似ているのである。

一方のドラは、たとえ義務であったとしても「時間と老齢もその性格を改善はしなかった」(p.196) 気難しい母親を実家に移り住んでまで看病し、看取り、葬儀を行っているのである。こうした点を考慮すると、エレンに対する一連のベッシーの言動はベッシー自身の気質に依るものと思われる。ベッシーの言動に対して、次のような作者自身の声がある。

What are we to do about these dreadful people? . . . If you think too hard of them and the waste of it all, your heart might break.(p.211)

ドラブルは、度々、インタビューに応じて、様々な事柄に関する自らの率直な考えを述べており、母親に関してもその難しい性格のことを次のように吐露している。

I suppose . . . my mother was a very difficult woman . . . [M]y mother was difficult. She was an unhappy woman, really.⁶

先の作者の声は、常々、ドラブルが抱いている母親に対するこうした思いが突出したものである。エレンとベッシーの関係を分析することで、ベッシー自身の人物像もある程度捉えることができたが、次に、ベッシーの幼児期からその人物像を考察してみる。

20世紀初頭、「石炭地帯(coal belt)」(p.5)であるブリスボロウに誕生したベッシーは、「石炭(coal)」に囲まれた日常であるにも拘らず、幼児期、「石炭」と「泥土(mud)」(p.6)をひどく嫌う。ベッシーは石炭が放つ「臭い ([s]mells)」(p.5)や「埃(grit)」に苛立ちを隠せず、「脱出をするか死ななければならない」(p.6)と幼児期から故郷脱出の思いを抱いている。ベッシーに訪れる故郷脱出の最初のチャンスは、大学進学である。ベッシーは猛勉強によって、大学進学を成し故郷脱出の夢を実現することはできたものの、自らが期待した優等学位取得には至らず、就職難も災いして戻らないと誓っていた故郷で母校の教壇に立つ選択をする。彼女にとっては、妥協の進路だったと思われる。同じことが、結婚にも言える。結婚に際しての彼女の心情を考察してみる。

幼馴染みのジョー・バロン(Joe Barron)は、彼の父親が家業を継がせる為にジョーの大学進学に反対であったこともあり、ベッシーに2年遅れて奨学金を取得し大学に進学する。大学時代、様々な節目で体調を崩し将来への不安を抱いていたベッシーは、度々、ジョーに励まされている。世界大戦の狭間であった当時を考慮すると、女性であるベッシーにとっては就職も結婚も困難だったことは容易に想像ができる。⁷ 学生時代の恋人との結婚話が破談になり、ベッシーは幼馴染みのジョーとの結婚へと人生の駒を進めるが、結婚に際して、当時の2人は次のような類似の思いを抱いている。

She thought she could do better with her life than marry a local boy like Joe Barron, . . . He thought he could do better with his life than marry a local girl like Bessie Bawtry, . . . (p.105)

ベッシーもジョーもこの結婚が妥協の産物だとの意識を抱いているのである。では、何故、2人は結婚へと人生の駒を進めたのだろうか。ベッシーの視点から考察してみる。

大学進学、そして、進学後の優等学位取得を目指してのベッシーの猛勉強ぶりを鑑みると、彼女が自尊心高き女性であることは明らかである。進学を故郷からの脱出手段としたにも拘わらず、社会情勢も影響して帰郷せざるを得なかった彼女は、再度、結婚を故郷からの脱出手段としている。「恐らく、ベッシーはブリスボロウから脱け出す為にジョーと結婚したのだろう」(p.130)と説明されている。自らの優秀意識と他に対する強い「蔑視(contempt)」意識を抱いたベッシーが、労働者の町であるブリスボロウと和解ができないのは尤もであろう。作品の冒頭で、ベッシーは炭鉱街の生活環境に我慢ができないと紹介されているが、エレンも多くは炭鉱夫である隣人達に対して蔑視意識を抱いており、彼女が母親の価値観を受け継いでいると考えることは妥当である。ベッシーの結婚選択の理由は、1つは結婚が故郷からの脱出手段であったということであるが、もう1つは次のドラブルの言葉が説明している。「母のキャリアが彼女が期待していたのと同じようには進んでいなかった時に、母は父と結婚をした。」⁸ 血のにじむような努力を自らに強いても、時代も災いして、望むような学位と職業に結びつかなかったベッシーは、⁹ 社会における自らの限界を感受し、ある意味、結婚は彼女にとって現実逃避の選択であったのである。次に、故郷脱出と現実逃避の手段である、不本意な結婚を選択したベッシーが、どのような家族関係を構築していくのかを検証してみる。

結婚を再度、故郷からの脱出手段としたベッシーは、彼女の願望どおりに結婚によってブリスボロウを脱出し、ノーサム(Northam)の郊外に移り住む。ジョーが第2次世界大戦に出征している間、ベッシーは疎開先で臨時教師として教壇に立ち、平穏な日々を過ごしている。戦線から帰還後、ジョーは政界進出をしたり、弁護士として活躍するが、ジョーの名声に反

してベッシーの精神状態は安定しなくなる。彼女は床に伏したり、その声の調子も生涯彼女から抜けることがない「口やかましい調子(nagging tone)」(p.170)となる。エレン同様子子供が好きではないベッシーは、子供達に愛を表すことなどなく、子供達は自分達を「欲せられていない副産物(unwanted by-product)」(p.183)と感じている。ケリー・マクウィリアム(Kelly McWilliam)は、「自らの(結婚)の決断に大いに不満なベッシーはますます不快になり、感情的に夫から、後には、子供達から孤立する」¹⁰と述べ、異常になって行くベッシーの精神の原因が彼女の不本意な結婚の選択にあると指摘している。マクウィリアムの指摘は、適切なものであると思うが、ベッシーの精神的不安定さの原因は彼女の不本意な結婚選択だけではなく、血のにじむような努力にも拘らず自らが望むキャリアには至らず、人生の転機で様々な妥協を余儀なくされた自尊心高きベッシーが現実を受け入れられないことにあると思える。ベッシーの精神的不安定さは後に改善するということではなく、一家がサリー州へ転居してからは、彼女は活力も失せ、孤独感に浸るといふ鬱状態になる。ベッシーがエレンの臨終前後に先のような反応をするのは、こうした彼女の精神状態も関係しているのである。

一方、ベッシーとの結婚は妥協の産物であったように思えるジョーは、結婚生活において、彼女へ献身的な愛を表している。戦争から帰還後、政界進出の転居に伴って、ベッシーに電化製品を買いそろえてあげるのも、感謝の言葉も発しないベッシーのベッドへ、長年、朝の紅茶を運んであげるのも彼の愛である。ベッシーの自尊心の高さ、利己主義、神経症といったマイナス要因に、後年、その性格が歪められて行ったジョーは、死を覚悟した時、その声に「生涯の後悔(a lifetime's regret)」(p.264)を滲ませて、娘、クリッシイ(Chrissie)に次のように言っている。

[Y]ou must watch out for your mother when I'm gone. Don't let her devour you.
... She'll stick with you. I'm afraid she's not the sweetheart that she used to be.
(p.265)

長年、ベッシーの尋常でない精神状態に苦しんできたジョーは、ベッシーと距離を保つことで自らの精神の平安と生活を守るよう娘に忠告せざるを得ないのである。

現在すでに故人であるエレンとベッシーというカッドワース家の母系系譜の人物達の家族関係を検証することで、エレンとベッシーには性格的類似点があること、そして、それぞれの母性や愛の欠如が、望ましい家族関係構築の妨げになっていることを考察してみた。それでは、そうした母親達に養育されたカッドワース家の現在世代の母系子孫達は、どのような人生を歩むのだろうか。

Ⅱ. 「現在」世代のカッドワース家の女性達とその母娘関係

ベッシーは2人の子供に恵まれているが、*The Peppered Moth*は女性系譜に焦点をあてた作品なので、作中、ベッシーの息子の影は薄い。ここでは、人間性に問題があるような祖母と母を持ったクリッシイ、及び、その娘ファロ(Faro)がどのような母娘関係を構築して行き、どのような人生を歩むのかを考察してみる。

クリッシイは世界大戦の影響で、幼い頃、父親の存在を身近に感じることなく成長している。少女時代の彼女は、ある種の自由思想の持ち主で、母親の人生を反芻して、学問をしても主婦として終わるのなら、現在を楽しんだ方が良いとの意識を持つ。母親の頭脳を継承しながら、彼女の「肉体的臆病さ」(p.174)を欠いているクリッシイは、母親が望まないような男友達と出歩き、少女時代を謳歌する。常に、神経症の母親を身近に感じることで「母のようになることは、(中略)クリッシイの最も陰鬱な恐怖」(pp.186-7)となり、彼女は母親が好まない男友達と出歩くことで、母親の人生に染まらないよう自己防衛していたと思われる。

母親の人生に反発するような少女時代を送ったクリッシイは、学問の大切さに目覚め大学進学をするが、¹¹ 1年次に今後の彼女の人生を左右することになるニック・ゴールデン(Nick/Nicolas Gaulden)と出会う。クリッシイは出会いから早い段階でニックの不実気づいているが、大学最終年に彼女から「試験的別離(a trial separation)」(p.247)を提案して、彼に自らを追い求めさせるきっかけを与え、学位取得もせずに21歳の誕生日に彼と結婚をする。クリッシイが自ら先導したような不実なニックとの結婚に何を望んでいたのかは、次の彼女の思いが語っている。

Chrissie felt, . . . that she had truly escaped Bessie at last. She had burned her boats. Goodbye, Mother.(p.255)

ベッシーが進学と結婚を故郷からの脱出手段としたように、クリッシイも進学と結婚を母親からの脱出手段としている。特に結婚では、クリッシイはニックの不実を感知しながらも、「舟を燃やしたのだ」と実家へ戻ることが不可能な決死の覚悟を示唆して、¹² ついに母親から脱出ができたと考えている。¹³ ベッシーに対するこうした否定的クリッシイの反応は、かつてケンブリッジを訪れたエレンをベッシーが強固に拒否したことを彷彿させるものがある。クリッシイは精神的不安定な母親を身近で見ながら成長している。そうした母親と彼女を象徴する家庭からの脱出をクリッシイが願ったのは、ある意味自然なことである。クリッシイはベッシーの好みではないニックの存在が身近にある以上、ベッシーが自分の周辺に現れることは少ないと判断してこの結婚を選択したと思われる。

母親からの脱出を願ったとはいえ、ドラブルが描く多くの女性達のように、クリッシイが

「肉体的臆病さ」(p.174)を備えていれば、彼女は信頼に値しないニックとの結婚の選択には至らなかったはずである。

A woman's first sexual experience is frequently disappointing and incomplete.
Chrissie Barron's, unfortunately for her, had been ecstatic.(p.244)

上記引用は、クリッシイが肉体的にニックに魅了されていたことを示唆している。ドラブルが描く女性達の多くは性的臆病者で、¹⁴ そのことが人生の岐路で彼女達の幸福を妨げている。クリッシイの場合は反対に、彼女の肉体的大胆さが人生の躓きを招き、彼女とニックの関係はすぐに終焉を迎えることになるが、彼女には一人娘、ファロが誕生している。

では、クリッシイとファロがどのような母娘関係を構築していくのかを考察してみる。しかしながら、クリッシイの人生はニックとの結婚生活が破局に至ることで終焉になるわけではない。それ故、先ず、彼女がニックとの結婚によって、本当にベッシーから解放されたのかを検証して、ベッシーとクリッシイの母娘関係が少なからず影響を与えるクリッシイとファロの母娘関係を考察することにする。

クリッシイは、ベッシーが好まないニックとの結婚でベッシーから解放されると考えていたが、身持ちが悪いニックの次なる女性の出現とファロの誕生までの10カ月間しか2人だけの生活は続いていない。度重なる新たな女性の出現で、クリッシイはニックとの結婚生活に終止符を打ち、ファロの進学を待って図書館で働き始める。元来、ベッシーの優秀さを継承しているクリッシイは、徐々に仕事において頭角を現す。そして、仕事を通して知り合った著名な考古学者、ドナルド・シンクレア(Donald Sinclair)と再婚をする。ニックを好まなかった知識人のベッシーは、学者のドナルドとクリッシイとの再婚を喜び、彼女の新居にも度々訪れるようになる。

1961年のクリッシイの最初の結婚から1980年代初めの彼女の再婚までの約20年間、作中から、ベッシーとクリッシイがどのような母娘関係であったのかは、はっきり分らない。しかしながら、ベッシーの精神的不毛さに悩まされ続け、クリッシイの再婚を待たずして1970年代後半に亡くなったジョーが、死を覚悟した時に娘に告げた母親に関する先の忠告から判断して、最初の結婚でクリッシイはベッシーから解放されることはなかったと思われる。そして、ドナルドというかつて大学で自分が専攻した学問領域を専門とする社会性を身につけた学者をパートナーにできたクリッシイは、自らの人生の再出発に成功したと同時に、母親、ベッシーとの関係も深まっている。クリッシイがベッシーを大西洋横断船旅に連れ出すのも、気難しいベッシーがそのことでクリッシイへ感謝の念を抱くのもその1例である。だが、母娘の幸福な時は、大西洋上でのベッシーの急逝によって長くは続いていない。クリッシイは、若い時には厭っていたベッシーと最後は通常の母娘のように一緒に旅に出れ

たことを喜んでいるように思えるが、ベッシーの突然の死に次のように感じている。

Time and space stretched before her. She was free to go where she would, and do what she would, . . . She no longer needed to protect her mother from the insults and derision of the world, from hostile strangers, from herself. . . . It was over.(p.325)

ベッシーの死による、今まで抑圧されていたクリッシイの解放感と安堵感である。元気だった実の母親の急死に、娘、クリッシイが解放感と安堵感を覚えることに、2人の関係の特異性を看取できる。

次に、クリッシイとファロの母娘関係を考察してみる。「プロローグ」でのドラとの登場が示唆するように、ファロは過去と現在を繋ぐ人物として存在している。そして、現在進行形でストーリーが展開するその現在の事柄に関して、ファロは中心的立場にいる。過去と現在が交錯する作品である*The Peppered Moth*で、現在進行形のストーリーとは、ホーソン博士の講演を聴くためにヨークシャーの教会に人々が会している「プロローグ」で語られる或る夏の午後のことから、ドラが倒れ、彼女の家の整理をファロが行うその年の冬のことまでと判断して良いと思われる。主に、この半年ほどの間の2人を観察することによって、彼女達の母娘関係を考察してみる。

ベッシーへの反発もあって、若い頃、自由奔放に生きていたクリッシイは、ニックとの離婚後は落ち着いた生活をしており、ファロに対しては母親として彼女の人生を見守っている。ベッシーのようになることが「恐怖(fear)」(p.187)であったクリッシイは、母親を避け、母親の愛に飢え成長してきたと思うが、ファロと2人で生きてきたクリッシイは、ファロとは通常の母娘関係を構築することができているように思える。クリッシイは誰よりもファロの幸福を願い、大西洋上でのベッシーの急逝の後、船上で気分転換に参加したルーレット占いでも、彼女はファロの将来の幸福に賭けてルーレットを回している。ファロ自身も自分が母親と「あまりに親密(too close)」(p.154)だと感じており、且つ、人生の先輩であるクリッシイを頼りにしている。科学ジャーナリストとして活躍する彼女には、同年代のセブ(Seb/Sebastian)というホラー小説を書く恋人が存在する。しかしながら、セブの陰鬱さと自分に対する依存を負担に感じ始めているファロは、新しい恋人、スティーブ・ニーマン(Steve Nieman)の存在もあって彼との別離を決意する。そして、ファロはその判断の妥当性の確認と自分を後押しして貰う為に、クリッシイに相談をするが、クリッシイの考えは次のようなものである。

[I]t is absolutely ridiculous for Faro to be wasting her young life running around

after somebody she doesn't even much like. Sebastian has no right to expect it, and she should tell him so at once. If Faro won't, Chrissie will. . . . She is much more concerned about her own daughter.(p.360)(underline mine)

かつてドラブルは、「母性愛は世の中で最も偉大なる喜びだと思う。(中略)母性愛はとても純粋な愛の形であり、性愛は殆どそうではない」¹⁵ と述べている。親子関係の難しさを描くことが多いドラブルであるが、彼女自身は母性愛の素晴らしさを理解している。クリッシイが、影のある男性に若さを浪費せずに自分の幸福を追うようファロに求め、彼女のことに一生懸命になるのは、娘を思う普通の母の姿であり、ドラブルが言うところの母性愛ゆえである。

クリッシイは母親の愛に飢え、且つ、神経症の母親から逃れることを人生の目標にして結婚へと急いだ。しかしながら、夫に選んだ男性は彼女に幸福をもたらすタイプの男性ではなかった。クリッシイは母親を反面教師として、母親として娘に愛を注ぐことを覚え、また、夫への虚しさもファロへの愛に変え、ファロとの関係を密なるものへと発展させてきたように思える。

Ⅲ. 作品の重層性について

*The Peppered Moth*は、1912年というベッシーの幼少期から彼女の死後約10年の1990年代初めまでのおよそ1世紀に亘るカッドワース家に連なる4代の女性達の人生模様を描いた作品である。女性の人生を描くというテーマだけに着目してみると、今までドラブルが何度となく繰り返してきたテーマであり、そこに新鮮さはない。だが、およそ1世紀に亘る1部のDNAを共有した女性達の人生模様を描くという今までにはないスケールの大きさがそこにはある。こうした作品に重厚性を加える為に、ドラブルは幾つかの創作上の技法を用いている。そうした技法に関して、考察してみる。

*The Peppered Moth*は、大きく2つのパートに分けることができる。その区分は、故人となっている過去世代に関するものと、現在、作中で生存している現在世代に関するものである。そして、ドラブル自身が「あとがき」で述べているように、過去世代の人生模様と家族関係は実録であるのに対して、現在世代のそれはフィクションである。ドラブルは、*The Peppered Moth*執筆に際して、この作品を家族史を記録したドキュメンタリーにしようとしていたのだろうか。それとも、小説にしようとしていたのだろうか。ノラ・フォスター・ストベル(Nora Foster Stovel)は、「*The Peppered Moth*は、ドラブルの母の幻影を眠らせるための試みである」¹⁶ と *The Peppered Moth*の果たしている役割を述べている。そして、ドラブルは巻頭辞にこの作品を「キャサリン・マリー・ブロアへ捧げる」と記している。こうした点を踏まえると、ドラブルの出発点としては、家族史の記録ということが中心だったので

はないかと推測するが、「あとがき」で彼女が述べているように、彼女は父母の実録を描くことでの創作上の様々な困難に直面している。こうした困難さが、ドキュメンタリーとしてのだけの作品の創作を不可能にし、ドラブルにとって新しいアプローチとなるドキュメンタリーと小説の要素をほぼ同比重で備える作品を生み出すことに彼女を導いたと思われる。作品の持つこうした2面的要素の為に、語りを例に取って見ても、作者、ドラブルは語り手であると共にその声が作中に現れたり、時代、ストーリーごとに異なった語り手が存在するものとなっている。

ドキュメンタリーとしての作品の創作が諸理由で不可能であったとしても、ドラブル自身が母親の実録を描くことだけに主眼を置いていたなら、*The Peppered Moth*はドキュメンタリーと小説の要素を同比重で備える作品とはならなかったのではないだろうか。そして、そこに過去世代の困難な母娘関係とそれとは対照的な現在世代の母娘関係を絡ませることで、ドラブルは実母の母としての姿勢を批判するだけでなく、様々な母娘関係のあり様を提示し、作品を膨らませ、その重厚性に繋げようとしていたように思える。また、*The Peppered Moth*で、ドラブルはフィクションの2世代を加えて4代に亘るカッドワース家の母系系譜の人物達を語る時に、彼女達の人生、家族関係を空間的、時間的に錯綜させて編み込むという手法を用いている。従って、ドラブルは、時系列により単純に過去世代の者の人生から語って行くという手法を取らずに、過去世代と現代世代の者の人生を交差させたり、時間を逆行させたりして、自由に語りを繋いでいるのである。¹⁷ ドラブルがフィクション世代を作品に加えなかったら、こうした空間的、時間的に錯綜した手法を用いることは困難だったはずである。更に、作品ではそれぞれの事柄の時系列がはっきり言及されていない点があり、時間も逆行したりしているので読者がクロノロジイを計算しなければならない所が多々ある。ドラブルが一種曖昧性を含むこうした手法に訴えたのは、読者に簡単にこの作品を読んで貰うことを避け、ある意味読者自身に想像力を働かせて、作中の過去の事柄から現在の事柄へとストーリーを繋いで行くことを求めていたからではないだろうか。ドラブルは、創作において、現代作家が求められていることを次のように述べている。

It is very difficult now to write a simple novel because post-modernism destroyed the simple novel. People started to write in a layered way and it's very hard to go back. It is very hard now to write a simple narrative. When I was young, I didn't worry about narrative techniques, I just wrote. But now even a young writer starting now, a young literary writer, will be confronted with all these difficulties about choices of narrative techniques. . . . We worry about technique and a lot of novelists, most novelists, use multiple viewpoints, multiple narrative systems . . .¹⁸

現代作家の1人であるドラブルは、現代小説に与えたポスト・モダニズムの影響を無視することができず、多くの現代作家同様に複合的視点を用いることや語りの技法に気を配ることの必要性を感じている。*The Peppered Moth*において、彼女が作品に難解さをもたらす先述したような技法を用いたのは、現代小説が直面しているこうした事情も無関係ではないと思われる。

次に、本作品のタイトルが意味することを考察してみる。「ペppard・モス」とは、自然界の荒波の中で生き延びる為に、環境の変化に順応してその羽根の色を変え、小鳥などに捕食されるのを防御した主にヨーロッパに生息する蛾のことである。¹⁹ドラブルが、「ペppard・モス」をメタファーとしてタイトルに採用しているのは間違いない。

本作品の中心人物であるベッシーは、故郷を嫌い様々な所に転居したが、自らの人生の展開を受け入れられずに神経症を発症し、環境に順応ができないまま亡くなっている。彼女の孫、ファロは初めて「プロローグ」に登場し、*The Peppered Moth*はファロで始まりファロで終わっている。作品の最後で、ファロは新たな恋を見つけ、また、途中で倒れたドラの家を処分する為に、彼女の家の整理をすることで見出した過去に繋がるものを捨てている。そして、ファロはドラの家の整理で、*Faro's Daughter* と *The Black Moth* という2冊の本を見つけている。ここには、過去を象徴するドラの衰弱に反して、若いファロが次代へとDNAを繋ぐことを意味する彼女の未来への羽ばたきを読み取ることができる。また、最後にファロが*The Black Moth*という本を見つけることは、祖母、ベッシーには出来なかったが、環境に順応して生きていく「ペppard・モス」同様に逞しく生きて行くであろう今後のファロのことが示唆されていると思える。

終わりに

*The Peppered Moth*は無名の老女とその傍らにいる若い女性の登場で始まり、若い女性、即ち、ファロに未来が託されて作品は終わる。過去世代の母娘関係、そして、過去から現在へ至る世代の母娘関係には、暗さと異様さが感じられるが、結末では、順応を表すそのタイトルに呼応して母娘関係にも明るさがある。こうした明るさを表す為にも、筆者はフィクションの現在世代の存在を必要としていたと思われる。

ドラブルは、巻頭辞にこの作品を「キャサリン・マリー・ブローアへ捧げる」と記しながらも、フィクションとなる現在世代も存在させて、その人生模様と母娘関係を描いている。そうすることで、ドラブルはこの作品をドキュメンタリーか小説か分からなくし、且つ、約100年に及ぶ1つの家に連なる4代の女性の人生を語るというスケールの大きな仕事に取り組んでいる。何故、ドラブルが彼女にとって初めての試みとなるドキュメンタリーと小説という2重の要素を同比重で備える作品を生み出し、過去と現在を錯綜させる語りを試みたのかは、彼女でないと分からない。しかしながら、初期の作品では平易を心がけていた彼女が、

年齢と共に作品に深みを増し、現代小説を取り巻く状況を認識し、読者に簡単に作品を解説して貰うことを避ける為に、こうした技法を選択したことは間違いのないと思える。20世紀の作品で、彼女は実験的に語りが交錯した技法などを用いていたが、ここにきて、本格的に実験小説を意識し始めているように思える。

注

本稿は、平成24年9月9日英米文化学会全国大会（於：山梨県立大学）において口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

1. 田原 節子、「虚構としての母の肖像—M.Drabble, *The Peppered Moth*を読む—」、『大みか英語英文学研究』第8号、2004年、p.44参照。
2. ドラブルは、「あとがき」ではっきりと*The Peppered Moth* は実母に関する作品だと述べると共に、母の死後、小説家の友人に「母の血をインクに用いるように」と助言を受けたと、この半家族史的作品を書くに至った動機を述べている。
3. Margaret Drabble, *The Peppered Moth* (Penguin Books 2001)をテキストとし、以後、引用には括弧内にページ数を記す。尚、日本語訳は拙訳である。
4. Tomoko Koyama氏は、労働者階級の者にとって教育は故郷からの脱出手段になり得ると述べている。Cf., Tomoko Koyama, “Margaret Drabble’s *The Peppered Moth*—English Literature, Class and the Nation,” *Horizon* 39 (2007): 64.
5. 故郷、ブリスボロウを嫌悪するベッシーは、1950年代にサリー州へ転居してからは、母親の見舞いとなるこの1回を除いてはブリスボロウに戻っていない。
6. Miho Nagamatsu, “Changes in Writing Methods and Points of View: A Conversation with Margaret Drabble,” *Bulletin of Kyushu Women’s University* 49.1 (2012): 231.
7. 歴史上、男性と女性の社会的地位が平等でなかったことは、周知の事実である。日本と比べて、イギリスは女性の社会進出が進んでいるように思えるが、ヴィクトリア時代(1837-1901)において、経済活動を行うのは男性で、家庭を守るのは女性だとする社会的イデオロギーが出来上がっている。ベッシーが生きた時代は、ヴィクトリア時代ではないが、20世紀初頭においてはヴィクトリア時代の社会的イデオロギーが残っていると考えるのは自然であろう。
8. “Mothers and Daughters,” *The Guardian* 16 Dec. 2000, 3 Aug. 2012 <<http://www.guardian.co.uk/books/2000/dec/16/fiction.features>>.
9. 20世紀後半においても、イギリスの最高学府における卒業時の学位の種類には、男女格差が生じている。大学教員の男女比率、職位も同様である。ベッシーが学位を取得し

た第2次世界大戦前となると、就業を含めて女性を取り巻く社会環境が更に厳しかったことは、明らかである。20世紀後半のイギリスの大学における男女格差の現状に関しては、岡山勇一、戸澤健次、『サッチャーの遺産—1990年代の英国に何が起こっていたのか—』、晃洋書房、2001年、pp.164-7参照。

10. Kelly McWilliam, “Origin of the Species: Margaret Drabble’s *The Peppered Moth*,” *M/C Reviews*, 3 Aug. 2012 <<http://reviews.media-culture.org.au/modules.php?name=News&file=article&sid=345>>.
11. クリッシイの大学進学は、母親の憂鬱症の、ごまかしの抱擁からの脱出だとの指摘もある。Cf., “*The Peppered Moth* by Margaret Drabble,” *The Guardian* 19 Jan. 2001, 3 Aug. 2012 <<http://www.guardian.co.uk/books/2001/jan/19/digestedread>>.
12. 『イメージ・シンボル事典』によると、舟を燃やすことは、帰還ができないということなので、背水の陣を意味している。アト・ド・フリース、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1994年、p.75参照。
13. ドラブルは「結婚」に関するエッセイで自らの結婚に触れて、「キャリアは家を離れる十分な理由と考えられていなかったのも、当時、女性達は母親から逃れるためにまだ結婚をしていた」と述べている。ドラブルの結婚は1960年で、クリッシイの結婚も同時期である。当時のイギリス女性達の結婚に対する考えが、クリッシイの結婚にも反映されていると思える。ドラブルの結婚観に関しては、Margaret Drabble, “On Marriage,” *The Threepenny Review* Fall 2001, 10 Aug. 2012 <http://www.threepennyreview.com/samples/drabble_f01.html>参照。
14. ドラブルは、性に臆病なイギリス女性達の姿は、かつてのイギリス女性達の典型的姿であると述べている。また、現在、イギリス女性達の性の捉え方は、かつてのイギリス女性達の消極的捉え方とは大きく異なっていることを指摘している。Nagamatsu 232-3参照。クリッシイは1940年生まれで、ドラブルの初期作品の主人公達世代である。しかしながら、本作品は2000年刊行の作品で、クリッシイはフィクションの人物であるので、彼女の性の捉え方に、ドラブルは現在のイギリス女性達の捉え方を反映させている。
15. Diana Cooper-Clark, “Margaret Drabble: Cautious Feminist,” *Critical Essays on Margaret Drabble*, ed. Ellen Cronan Rose (Boston: G.K. Hall & Co., 1985) 28.
16. Nora Foster Stovel, “Margaret Drabble: *The Peppered Moth*,” *The International Fiction Review*, 19 Aug. 2012 <<http://journals.hil.unb.ca/index.php/IFR/article/view/7760/8817>>.
17. 田原、p.43参照。
18. Nagamatsu 229.
19. Cf., “Peppered Moth Evolution,” *Wikipedia, The Free Encyclopedia*, 31 Aug. 2012 <http://en.wikipedia.org/wiki/Peppered_moth_evolution>.

A Study of M. Drabble's *The Peppered Moth*: Its Portrayal of Family Relationships and its Structural Complexity

Miho NAGAMATSU

Division of General Education, Kyushu Women's University,
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

The Peppered Moth is Margaret Drabble's 14th novel. It is a story about the female members of four generations of one family. After her mother's death, Drabble's novelist friends suggested that she write about her mother. Its main character, Bessie, is based on her mother.

Bessie hates her hometown and hopes to escape from it. Her dream comes true as a result of entering the University of Cambridge with a hard-won scholarship. However, she is forced to come back to her hometown after graduating in about 1930 because of the shortage of jobs. She gets married to a local man whom she does not love deeply to escape from her hometown again. Frustrated in her life, that is, in her career and marriage, she isolates herself from her family and suffers from mental illness. In addition to these biographical characters, Drabble creates fictional ones, Bessie's descendants, who appear in the work. This is why this work has two aspects: that of a documentary and that of a novel. In this paper, the writer analyses these fictional and non-fictional family relationships and then explores the way in which Drabble narrates the lives of the members of the four generations. She does not narrate them according to chronology but by mixing past and present events. If she had wanted to write only about her family history, she would not have had to make fictional characters appear in the work. By introducing them and weaving past and present in her narration, Drabble makes the work complex. She has been known as an author who writes especially about daily matters. However, in recent years she seems to have been conscious of her writing technique above all.